



学校教育目標 進んで学ぶ子 仲良くできる子 たくましい子  
児童数 男子473名 女子439名 計912名

㊦っかりと聞き・㊦くわく未来を語り・㊦すんで学び・㊦れにも仲良くできる しわすだっ子

## 期待や応援が児童の意欲を高める（ピグマリオン効果）

校長 富山 益光

サマースクールでは、多くの児童と再会ができ、日焼けした姿から充実した夏休みを過ごしたことがうかがえ、うれしくなりました。2学期も児童1人1人が、日々の学習や学校生活、学校行事を通して、学びを深め、自己肯定感を高めつつ、自分自身を唯一無二のかけがえのない存在であるという自覚をもてるように、教職員一同力を尽くしてまいります。

2学期は、学校行事が目白押しです。9月には運動会、11月は音楽会。6年生の修学旅行は10月、各学年の遠足等の多くも、この2学期に計画しています。特に、運動会と音楽会では、多くの保護者、地域の皆様に児童の活躍をご期待いただき、ご声援をいただけますように実施方法を工夫してまいります。

さて、夏休み中のある日、2学期も児童の意欲をさらに高めるにはどうしたらよいかと考えていると、学生のとときに学んだ「ピグマリオン効果」を思い出しました。ピグマリオン効果とは、教師の期待が児童・生徒の学習行動に影響するという理論です。米国の心理学者ローゼンサールらの実証的研究によれば、ある学校の1年生から6年生までの児童に、知的潜在能力を測定するテストだといって、知能テストを実施した後、検査結果とは無関係に各学級で20%の児童をランダムに選び、このテストで高い得点をとった者だとして、教師にその名前のリストを渡します。つまり、そのリストの児童の成績が向上する可能性があることを信じ込ませたのです。8か月後に、同じテストを実施したところ、教師に期待をもたせた児童のIQは、全体的に向上したそうです。教師は、知能が伸びると告げられた児童に対して、多くの働きかけを行っていたことに起因します。期待をすれば、関わり方が変わります。関わり方が変われば、よい変容がみられるということです。

また、観客とアスリートのパフォーマンスとの関係を、インターネットで検索していると、興味深い検証結果が掲載されていました。ある高校のハンドボール部で全国的な強豪校での検証でした。紅白戦を行い、前半は無観客、後半は予告なしに同じ高校の生徒を観客として200名程入れて、選手のパフォーマンスの違いを検証した結果、運動量や身体機能がおおよそ20%アップしたそうです。心拍は87.83%から92.83%となり、心拍数が上がり疲れている状況にもかかわらず、走行距離は、1.53kmから1.73kmに、ステップ数は1486歩から1809歩にと、ともに向上が見られたそうです。試合後の生徒へのインタビューでは、「観客がいると、モチベーションが上がり、よいプレーをしたいという気持ちから、自然と体が動いた。」と答えていました。

児童にとって、ご家族や地域の皆様に期待され、応援されることは、意欲を高め、さらに高次の目標形成へと向かい、ひいては、自己肯定感を高めることにつながるものと信じています。本校自慢の児童の姿を、学校行事等を通してご覧いただけますと幸いに存じます。

今学期も、本校への変わらぬご理解、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

1) 参考文献 成瀬悟策監修 教育心理学 丸山千秋編著 小林出版

2) 株式会社運動通信社 <https://prtmes.jp/main/html/rd/p/000000014.000018536.html>